



エイズ・結核・マラリアの
ない未来に向けて
日本の力を



FGFJ レポート

September 2015 No.8

グローバルファンド日本委員会
Friends of the Global Fund, Japan
Joining the Fight Against AIDS, Tuberculosis and Malaria

グローバルファンド@バンコクから

6月24日～25日、グローバルファンドのパートナーシップ・フォーラムがバンコクにて開催されました。パートナーシップ・フォーラムは参加型の運営を重視するグローバルファンドを象徴する仕組みです。アジア太平洋地域やアフリカから120人以上のNGO・NPO代表、感染症当事者の代表、公衆衛生の専門家、政治家、政府代表、国際機関代表、グローバルファンド職員が参加し、フィールドでの経験を元に、エイズ・結核・マラリアの流行を終息させ、持続的で強靱な保健システムを構築するための戦略を話し合いました。



©The Global Fund/ Jonas Gratzner

コミュニティの声を聴きたい グローバルファンドのパートナーシップ・フォーラムに参加して

コミュニティの意見を積極的にくみ取り、支援の方針に反映させることは、グローバルファンドの大きな特徴の一つです。今回のパートナーシップ・フォーラムでは、三大感染症プログラムを推進する上でのコミュニティの役割強化、人権やジェンダーに配慮することでの保健医療へのアクセス保証などについて、参加者から強い要請がありました。感染症プログラムの効果を最大化するために、国境を越えて感染症政策を調和させていく必要性も

強調されました。また、紛争、災害や感染症の急な拡大など緊急事態の際には、特別な資金提供やプログラムの見直し、人道支援団体との効率的な連携、正確な情報収集やリスク管理など、グローバルファンドには今以上の柔軟な対応が求められているという声が多く寄せられました。

支援を受ける立場から次のステージへ

アジアでは感染症対策や医療制度全般の向上により、多くの国でエイズ・結核・マラリアの疾病負担が減ってきている一方、急速に経済成長を果たした国の中には、自国の経済状況に見合った予算を感染症対策に割り当てずに、グローバルファンドの支援に頼る傾向があるこ



「グローバルファンドは真のパートナーシップです。感染症対策は、病気とともに生きている人々と彼らを支える人々が自ら戦略をたてることで、よりパワフルで効果的なものになるでしょう。」

—グローバルファンド理事会副議長アイダ・クルトヴィック（ボスニア・ヘルツェゴビナのNGO、パートナーシップ・イン・ヘルス事務局長）

©The Global Fund/ Jonas Gratzner



「タイはグローバルファンドから自立しなければいけないことは分かっています。でも、グローバルファンドには移動労働者など特定の人口集団への支援を続けてほしい。なぜならば、政府は彼らをケアしないからです」

——シーハリ・アチャリャ(ラックス・タイ財団)

とが指摘されました。自国の感染症対策に対して当事者意識を強め、適切な国家予算を割り当てもらうために、より拘束力のある資金供与メカニズムが必要と同時に、グローバルファンドの支援を受ける立場から次のステージへ円滑に移行ができるように、綿密な計画やサポート体制が不可欠であるという点についても参加者に広く認識されました。

フォーラムでは、若者の発言が目立ちました。「三大感染症は以前にも増して若者に影響を及ぼしている。若者はもっと意思決定のプロセスに参加すべきではないか」とある当事者グループのユースリーダーが若者の積極的

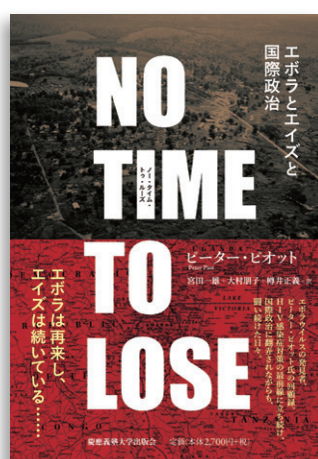


「グローバルファンドには、人権やジェンダーのプログラムへの投資を増やしてほしいです。パプアニューギニアでは、セックスワーカーが自分の仕事やHIVに感染していること、治療への権利を口にしたら、自分の命を危険にさらすこととなります。」

——マウラ・エリベ(パプアニューギニアのHIV陽性者・エイズ患者団体、Igat Hope)

な関与を呼びかけました。

同様のパートナーシップ・フォーラムはアフリカのエチオピアと南米のブエノスアイレスでも開催されました。こうした地域会合とオンライン上のe-フォーラムを通じて集まった世界各地からの意見やアイデアや、世界保健機関(WHO)などの国際機関との協議は、提言にまとめられてグローバルファンド理事会に提出されます。理事会は2016年春に、グローバルファンドの今後の戦略と方向性を決める次期5か年計画(2017-2021)を策定する予定であり、一連のフォーラムはそのためのコンサルテーション・プロセスの一環となります。



ピーター・ピオット回顧録 待望の日本語版出版

「感染症に未来はないぞ。
もう片付いているのだから。」(中略)
私は教授の言葉を無視した。
——ピーター・ピオット



ノー・タイム・トゥ・ルーズ —— エボラとエイズと国際政治

定価 2,700円＋税
発行 慶應義塾大学出版会
著者 ピーター・ピオット
訳者 宮田一雄(産経新聞社特別記者)
大村朋子(元NHK記者・国際放送キャスター)
樽井正義(慶應義塾大学名誉教授)
出版協力 (特活)エイズ&ソサエティ研究会議
(公社)グローバルヘルス技術振興基金
(公財)日本国際交流センター/グローバルファンド日本委員会

エボラ・ウイルスの発見者の一人であり、世界のエイズ対策の最前線で闘ってきたロンドン大学衛生熱帯医学大学院学長のピーター・ピオット氏(前UNAIDS事務局長)の回顧録日本語版「ノー・タイム・トゥ・ルーズ——エボラとエイズと国際政治」が2015年3月に慶應義塾大学出版会から出版されました。グローバルファンドが生まれた国際的な背景が鮮明に描かれていることから、当委員会では日本語版の出版にご協力しました。

「感染症に未来はないぞ。もう片付いているのだから。」
—1974年、母国ベルギーで医学の学位をとったピオット氏が、卒業後は感染症を専門に研究したいと相談した時、指導教授はこう言いました。当時、抗生物質やワクチンの開発が進み、感染症はもう制圧できたと思われていたからです。

教授の言葉を無視して感染症研究の道に入ったピオット氏を待ち受けていたのは、新たな感染症の時代の幕開けでした。本書では、多くの研究者とともに、アフリカの奥地で謎の出血熱を引き起こすウイルスを発見しエボラと名付け、流行を沈静化させるまでの冒険談のような

エピソードと、その後、エイズの流行が瞬く間に世界中を震撼させる中、国連合同エイズ計画（UNAIDS）の事務局長として、政治指導者、宗教指導者、国際官僚、企業のトップを説得し、エイズを国際社会のアジェンダに押し上げ、エイズ対策を進めた様子がダイナミックに描かれています。

エイズの世界的流行は依然として続き、今までとは比べ物にならない規模でエボラが再来した現在、本書は、感染症問題の本質と、感染症との戦いが国際公共財であることを改めて教えてくれる貴重な資料となっています。ぜひご一読下さい。

出版記念 セミナー

JCIE / グローバルファンド日本委員会では、ピオット氏の来日にあわせ、出版記念セミナーを開催しました。出版記念セミナーの一部をご紹介します。



ピーター・ピオット氏とNHK国際放送局NEWSLINE編集長の榎原美樹さんとのトーク

UNAIDSの事務局長として目標を絞る

榎原：1994年にUNAIDSのトップに就任された時、ひどく孤独だと回顧録に書いておられます。UNAIDSの事務局長で、一番良かったことと一番辛かったことは何でしょうか。

ピオット：一番良かったことは私がボスであること、一番悪かったことは私がすべてに対して責任を持たなければいけないことです（笑）。国連システムの中で仕事をした経験はなく、多くの人との闘いの連続の日々で辛かったのは確かです。

他方、具体的な目標がある時には国連は効果的に機能することも知っていました。そこで私は目標を一つに絞りました。エイズを国際社会の政治課題に押し上げ、エ

イズの流行から人の命を救うことです。偶然のめぐりあわせですが、私が就任してまもなくエイズの発症を抑える薬が開発され、エイズを治療することができるようになりました。これは私にとって幸運でした。

ただし、闘いの最初は非常に厳しいものでした。エイズの治療は、当時一人年間14,000ドルという高価なものだったからです。エイズの世界的流行を抑えるためには、何としてでもこの価格を300ドルくらいまで下げ、途上国でも治療を始める必要がありました。周囲には、価格を下げるのは不可能だ、保健システムの整っていない途上国での治療は不可能だという人ばかりで、不可能である理由を延々と並べ立てそれに合意するための会合に無駄な時間が費やされている状態でした。私は、それらを無視して製薬企業と価格引き下げの交渉を続けました。



セミナー第二部：若手リーダーとの対話
(左から) 地域医療とグローバルヘルスで活躍している長野厚生連佐久総合病院の加藤琢真さん、児童労働問題に取り組むNPO法人ACE代表の岩附由香さん、ピオット氏、日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラスの高久陽介さん、日本国際交流センターの伊藤聡子(モデレーター)



エイズを初めて議題とした2000年最初の国連安全保障理事会で、コフィー・アナン事務総長とアル・ゴア副大統領 (UNAIDS) (本書より)

エイズを国際社会の政治課題に

科学者としては、科学的根拠のあるデータがあれば、物事は自然に動いていくと思っていました。だが、それは甘かった。政治的に動く必要があったのです。当時、エイズの治療には、多くの薬を一日に何度も正確な時間に服用し、病気の進行をきちんと判断することが必要でした。医療制度が整っていない途上国で薬が使われるようになると、不適切な薬の服用によって薬に耐性を持つウイルスが出現するという懸念が、途上国での治療開始に対する障壁でした。

そこで私たちは、懐疑派を説得するために、ウガンダやコートジボワールで試験的に治療プログラムを行い、途上国であってもわずかな投資をすれば、治療を適切に管理し命を救うことができるということを実証しました。

次は、物事が決まる場所にこの問題を持ち込む必要がありました。米国の国連大使を務めていたリチャード・ホルブルック大使の協力を得て、2000年1月の国連安全保障理事会にエイズを議題とすることができました。安保理で保健医療問題が討議されたのはこれが初めてでした。

これが様々な面で突破口となり、やがて、製薬会社が薬の価格を途上国向けに値引きすることに合意し、またグローバルファンド(世界エイズ・結核・マラリア対策基金)

が設立され、米国の大統領緊急エイズ救援計画も始まり、途上国でエイズ治療が可能になったのです。

目標に向け、時間を無駄にしない

皆さんにお伝えしたいことは、多くの人の命を救い、政策を変えたいと思うなら、焦らずに長期的な目標と戦略を持つことです。ある程度は頑固であっていい。決めた目標を実現するために、余計なことに時間を費やさないことが大切です。No Time to Loseです。

日本人には、もっと世界に出ていき、もっと世界のことを取り入れてほしいと思います。日本には、科学技術をはじめ世界に貢献できる知見が数多くあるのですから。

◎本稿は、セミナーでの発言をJCIEの責任で編集したものです。
セミナー全体の報告は以下ウェブサイトにてご覧いただけます。
http://fgfj.jcie.or.jp/topics/2015-04-17_booklaunch_pg1

ピーター・ピオット (Peter Piot)

ロンドン大学衛生熱帯医学大学院学長、前国連合同エイズ計画事務局長

1949年ベルギー生まれ。1974年ヘント大学でM.D.医学博士、1980年にアントワープ大学でPh.D(微生物学)取得。アントワープ熱帯医学研究所の微生物免疫学教授、世界保健機関(WHO)の世界エイズプログラム副ディレクター等を経て、1995年から2008年まで国連合同エイズ計画(UNAIDS)の初代事務局長(国連事務次長)。2010年から現職。2013年に日本政府より第2回「野口英世アフリカ賞」を授与される。TIME誌の2014年「パーソン・オブ・ザ・イヤー」「エボラと闘う人々」の一人に選出。



公益財団法人 日本国際交流センター(JCIE)

日本国際交流センターは、国際関係や地球的課題、政治・経済・社会など幅広い政策課題をめぐり、日本と諸外国の相互理解と協力関係を促進することを目的として1970年に設立された民間の事業型財団です。東京とニューヨークに拠点を置き、国際的な政策対話・共同研究や政策提言、各種交流プログラム、企業市民活動の推進やNPO・NGO支援など、非営利・非政府としての立場から幅広い国際交流事業を実施しています。



グローバルファンド日本委員会は、世界エイズ・結核・マラリア対策基金(グローバルファンド)を支援する日本の民間イニシアティブです。グローバルファンドに対する理解を促進するとともに、感染症分野における日本の役割を喚起し、政策対話や共同研究、国際シンポジウム、視察プログラムなどを実施しています。(公財)日本国際交流センターのプログラムとして運営されています。

FGFJレポート 2015年9月 No.8

編集・発行：
公益財団法人 日本国際交流センター(JCIE)

〒106-0047 東京都港区南麻布4-9-17
Tel: 03-3446-7781 Fax: 03-3443-7580
Mail: fgfj@jcie.or.jp
<http://fgfj.jcie.or.jp>